

正副議長就任記者会見（H 2 9 . 3 . 2 2 ）

（熊谷議長就任挨拶）

この度、議員各位の御推挙を賜り、第 8 1 代青森県議会議長の重責を担うことになりました熊谷雄一です。

身に余る光栄であり、心から感謝申し上げますとともに、職責の重大さを改めて痛感している次第です。

地方自治法の中で、議長の権限として、議場の秩序の保持、議事の整理、議会事務の統理などの基本的な役割があると認識しております。それをしっかりと果たしていくとともに、青森県議会基本条例に基づき、県民の視点に立って、県民の負託に的確に corres pond するべく、誠心誠意取り組んでいく所存です。

議員各位や執行部の御協力はもとより、どうかマスコミの皆様方の御協力も心からお願い申し上げまして、議長就任のあいさつとさせていただきます。

（質問）

○記者

様々な県政課題が堆積しておりますが、議長として特に当たっていきたいものがあるか伺います。

○議長

議長になってすぐですので、一般的な話になってしまいましたが、「青森県基本計画未来を変える挑戦」が仕上げ段階に入ると知事もおっしゃっていますので、一緒に取り組んでいくということと、人口減少対策としての「まち・ひと・しごと創生青森県総合戦略」の取組をしっかりと進めていくということ、まずそこをしっかりとやっていきたいと思います。

○ 記者

県議会で区割りの見直しや定数の問題があると思います。議員定数等検討委員会を立ち上げて議論は続いておりますが、前任の清水議長は、一人区や飛び地の解消に積極的な発言をされておりました。議長としてはどのようにお考えでしょうか。

○ 議長

議長に就任する前までは委員会のメンバーでした。その中での議論は、選挙の区割りなどの公職選挙法の関わり方の整理という段階で終わっており、48人の定数を維持することだけは決まっています。したがって、委員会の中で、成田委員長を中心に検討されていますので、この場で、個人的な考えを述べるのは差し控えさせていただきたいと思います。今後の成田委員長をはじめとする委員会の検討状況を注視してまいりたいと思います。

○ 記者

座右の銘を教えてください。

○ 議長

政治家としての信条となりますと、県民や執行部との信頼関係、議員同士の信頼関係ということからいうと、論語の「^{たみ}民^{しん}信^な無^くば^た立たず」ということを心がけております。

自分の生き方としては、湯川秀樹先生の言葉で「1日生きること、1歩進むことであリたい」、あるいは「一日一生」という言葉もありますが、1日1日を大切に積み重ねていきたいと思っております。

余談ですが、その1日を大切にするためにも、朝の時間を非常に大事にしており、朝4時半には起きるようにしています。

○ 記者

震災から6年が経ち、大きな被害を受けた八戸市も、被災地の中ではいち早く復旧していますが、東北各地を見るとまだまだ復興途上にあるというのが現状です。東日本大震災対策特別委員会委員長を努められた御経験を踏まえて、震災に特化した所感をお願いしたい。

○ 議長

6年前に震災がありまして、3月11日のちょうど1か月後に我々の統一地方選挙が重なっておりました。あの時ほど、政治が期待され、その期待に応えなければいけないと思った時はありませんでした。あの時の被災された方々の政治に対する期待に応えていくということが、私にとりまして、その後の原点となっており、震災を風化させてはいけないというのは当然ですけれども、私も決して忘れることはありませんし、政治をやっていく上でも決して忘れてはいけないと思っております。

○ 記者

何か印象に残っている場面や、有権者からいただいた言葉はありますか。

○ 議長

ちょうど選挙ということで、選挙の時は握手をするのですが、その握手をする力がすごく強いのです。本当になんとかしてくれ、頼むという強い思いを感じまして、

期待を裏切ってはならない、やらないといけないと思いました。

また、3月12日に、当時、自民党は野党でありましたが、大島代議士が交通事情の悪い中、何とか八戸に駆け付け、一緒に現場を回ったとき、「慄然とする」という言葉を代議士がお使いになりました。そして、これは今までにないような、超法規的な施策を考えながら、なんとしても復旧させていかなくてはいけない、とにかく被災した方々にこれで商売を辞めたとか、もうだめだとか、そういうことを絶対に言わせるな、それが君の役目だと言われて、次の日から、被災したところを一軒一軒回らせていただき、そういうお声掛けをさせていただいたということが、非常に自分にとっては印象に残っております。

○ 記者

議長は激務ですが、特に息抜きでやっていることはありますか。

○ 議長

読書はよくしますが、実は学生時代にバンド活動をやっていたことがあり、さすがに今は自分のバンドを持つ時間はありませんが、最近、シャンソンやカンツォーネのレッスンをたまに受けております。1年に1回ぐらい、皆さんの前でお披露目をするのが、息抜きというか、頭がそちらに集中できるひとときかと思っております。

○ 記者

前議長が任期満了の前で辞任したが、ご自身の任期についての所感をお願いしたい。

○ 議長

前議長のことについては、一身上の都合でお辞めになったということなので、それは尊重したいと思います。

私自身の考えですと、地方自治法上、任期は4年ということになっていきますし、議長としての役目をしっかり果たしていくという点からいうと、今からですと2年となりますが、そこはしっかりと全うしていくべきであろうと思っております。

○ 記者

議会改革については、まとまってきたと思うのですが、新たに議論や必要性を考えていることはありますか。

○ 議長

新しい考えというよりは、つい先ほどまで議会運営委員会の委員長という立場で取り組んできて、改革という一つの方向性として、再質問から一問一答方式を導入することを決定し、6月議会から取組が進むと思いますので、まずはここをスムーズにスタートさせて、議論を深める、県民に分かりやすい議会にしていきたいと思います。

以上です。

（山谷副議長就任挨拶）

先ほど本会議場におきまして、青森県議会第79代副議長に選任されました山谷清文です。

誠に名誉でありますとともに、身が引き締まる思いでこの場に立っております。

青森県は、多くの課題を抱えております。三村県政になってから、だいぶその課題も克服の兆しが見えておりますけれども、まだまだ完全な克服には至っていない状況にあります。そういう意味では、県議会としても多くの課題に取り組む必要があります。そのような中で、副議長という役職をいただき、これまで以上に取り組んでまいりたいと考えております。何はともあれ、一つ一つ課題に取り組みながら、県民の声に耳を傾けて、県民が何を望んでいるのか、それを政治家として受け止めながら、これからもまた、熊谷議長を補佐しながら、熊谷議長とともに、議員の皆さんと一緒に頑張ってまいりたいと考えております。

（質問）

○記者

これから取り組む課題はありますか。

○副議長

議会の中でも青森県にとって一番問題になっているのは、一つは、人口流出の問題、それから、短命県返上の問題、これが克服しなければならない大きな柱の2本と私は捉えています。

今までもいろんな取組をやっておりますが、一朝一夕で効果が上がるものでもありません。県行政でもいろいろ手を尽くして、事業を推進し、政策も立案しながら進

めているところですが、青森県が過去何十年もの間にこういう形になってきたもので、おそらく短命県というのは、50年、80年前から、短命県ワーストクラスだったと思います。それから、人口流出も、これまで、昭和の時代、それもひょっとすれば昭和初期から、人材供給県ということで、昔は「金の卵」という言葉も使っていましたが、若い世代がどんどん労働力として、あるいは、学校進学のために県外に出て行っていることが続いていると思います。それを、システムを変えろというか、何とか、今、歯止めをかけようと、私たちも県行政も一緒に取り組んでおりますが、まだまだ、結果が出ていない。本当に毎年毎年人が少なくなっているというのを実感していますし、それに対して、県議会としても、引き続き、政策あるいは施策として、対応していかなければならないと考えています。

○記者

座右の銘を教えてください。

○副議長

私は、28歳から政治の世界を目指して、いろいろ選挙でもずいぶん失敗をしてきました。苦労もしましたが、そういう意味では「けんにんふふばつ」という言葉があります。いくら失敗や不運な目にあっても、頑張って自分の目的、目標に向かって突き進むという気持ちでいつもこの言葉を頭に置いております。

○記者

政治家を志したきっかけは何ですか。

○ 副議長

父親が南津軽郡選出の自民党の県議会議員でありまして、私が高校生の時に亡くなりましたが、政治家の後ろ姿を見て育ちました。父親が元気なときに、将来は人の役に立つような仕事に就けとよく言っていたものですから、東京の大学を卒業してから、東京に勤めていたのですが、ふるさと青森県を遠く離れたところから見て、もうちょっと青森県に頑張ってもらいたいという気持ちをずっと持っていました。その後、いろいろなことがあって、青森県の窮状を救うには、政治がちゃんとしなければならぬと考え、政治の道を志して、政治の道でなんとか、青森県のお役に立ちたいと考えまして、市議会議員からやってまいりました。

人生、名前のとおり、山あり谷あり、いろいろ失敗もありましたが、なんとか、県民の皆さんの少しでもお役に立てる仕事ができている現状であります。

○ 記者

山あり谷ありとおっしゃっていましたが、それでも県議会議員選挙に挑戦するのは、どういう思いがあるのでしょうか。

○ 副議長

何としても、ふるさとの役に立ちたい一心です。現実には、今現在でも、困っている人がたくさんいるのです。困っている人がいたら、助けるとというのが政治だと思っています。よく聞かれますけれど、やっぱり人助けなのです。社会的に困っている人を助けるとするのは、政治が一番てっとり早いというか、政治の力でなんとかなる部分がたくさんあると思いますので、そういう気持ちでい

ます。

○ 記者

家族構成はどうなっていますか。

○ 副議長

87歳の母と家内と息子が1人。息子は現在、京都の大学に行っていますが、家族は4人です。

○ 記者

趣味は何ですか。

○ 副議長

読書や人と話をすることです。

以上です。